

学生海外調査研究	
G.V.ローシーのロンドンにおける活動に関する史資料収集	
山田 小夜歌	比較社会文化学専攻
期間	2014 年 11 月 1 日～2014 年 11 月 9 日
場所	イギリス
施設	ウエストミンスター・アーカイブ・センター、ロイヤル・アカデミー・オブ・ダンス、 ウエストミンスター・レファレンス図書館、ヴィクトリア&アルバート博物館

内容報告

1.調査の必要性・目的

筆者は、日本バレエ草創期に来日した G.V.ローシー[Giovanni Vittorio Rosi, 1867-?]について研究を進めている。ローシーは、祖国イタリアにてバレエの教育を受けた後、プロフェッショナルとしてイタリア、そして英国ロンドンのヴァラエティ・シアター¹を中心に、バレエ振付家・ダンサーとして活動した。その後、ローシーは明治末期に開場した帝国劇場の歌劇部の教師として日本に招聘され、舞踊、歌劇・喜歌劇、演劇作品の上演に関わり、歌劇部の解散後も 1918 (大正 7) 年にアメリカに渡るまで自ら主宰したローヤル館にて作品の上演を続けた。

こうしたローシーの日本における約 5 年半 (1912.8-1918.3) の活動は、先行研究において「オペラの場合のみならず、翻訳劇の上演にも少なからぬ影響を与えた」(大笹、1986、p.27) と評価されたほか、ローシーを「日本で初めてバレエを教えた教師」(上野、1992、p.1) として位置づけるなど、大正初期の日本における様々な舞台芸術に影響を及ぼしたことが分かる。

筆者は、これまで国内で一次史資料や関連する文献の収集を行い、ローシーの在日中の活動について調査、検討を行ってきた。その結果、彼の指導には「型」の習得というバレエに根差した理念が存在していたほか、上演に関わった作品は、彼が来日前に活動していた地で上演されていた作品群との共通性が示唆された。特に、彼が日本で上演した 2 作品については、先行研究でもロンドンのヴァラエティ・シアターで実際に上演されていた作品との関連性が指摘されている。上演作品に関わる国内の一次資料から得られる情報は非常に少なく、特に舞踊作品についてはその詳細が不明である。したがって、彼が在日中に上演した作品についてより詳細に検討するためには、彼の来日前の活動、特にロンドンにおける活動を調査・検討することが必要であると考えられる。

上野房子氏の「日本初のバレエ教師 G.V.ローシー 来日前の歩みを探る」(上野、1992、pp.1-11) は、ローシーおよび妻のジュリア・リーヴェ[Julia Reeve]のロンドン時代の出演作品を抽出し、その内容や評価にも触れた、大変貴重な先行研究である。しかしながら、ローシーとリーヴェに関する記述には他の文献との間に複数の相違点が見られるなど、以前不明な点が多くある。また、舞踊の研究においては、公演プログラムや新聞・雑誌記事といった一次資料に触れることによって、より具体的な作品の検証や上演状況の理解が可能になる。そうした一次資料は、一部が文献やインターネット上で閲覧が可能だが、全貌を読み解くには全く不十分である。

そこで、本調査では、ローシーとリーヴェが来日前の 1902 (明治 35) 年から 1912 (大正元) 年まで在籍、または上演活動に関与したとみられるアルハンブラ劇場[Alhambra Theatre]、エンパイア劇場[Empire Theatre]の公演プログラム、舞台写真、関係する新聞・雑誌記事といった史資料の収集と閲覧を最大の目的とした。両劇場が上演したバレエ作品については、アイヴァ・ゲストの著書 *Ballet in Leicester Square* (Guest, 1992) の巻末資料として、初演順に列挙されている。その情報を主な手掛かりに、作品内容の詳細と、ローシー夫妻の関わりについて調査を行う。こうして得られた資料を読み解き、分析していくことで、これまで明らかにされてこなかったローシーの日本における上演活動について、より詳細に理解が得られるものと考えられる。

2.調査の内容・成果

筆者は、今回現地調査を行うにあたり、英国やロンドンの劇場に関する資料をシアター&パフォーマンス・コレクション[Theatre and Performance Collection]として多く所蔵するヴィクトリア&アルバート博物館[Victoria&Albert Museum]に事前に連絡を取り、資料閲覧の申し込みを行っていた。しかし、調査の 1 週間前に先方の都合により閲覧室を急遽閉館するとの連絡を受け、同館閲覧室での資料の閲覧が叶わなかった。しかし、担当者の方が気を利かせ、筆者の調査および研究内容を同館のダンス担当学芸員であるジェーン・

ブリッチャード氏[Jane Pritchard]へと転送して下さった。ブリッチャード氏は、バレエおよびダンス史専門の研究者で、ロンドンのヴァラエティ・シアターにおけるバレエについても複数の論文を残している。そのブリッチャード氏より、貴重なローシーおよびリーヴェに関する情報と、ロンドン内の関連する一次資料所蔵施設に関する情報をご提供頂いた。本調査は、筆者が事前に調べ得た資料や施設に関する情報の他に、ブリッチャード氏の情報提供に基づいて行われたことを書き添えておく。

2-1. ウェストミンスター・アーカイブ・センターによるプログラムの閲覧

ウェストミンスター・アーカイブ・センター[City of Westminster Archives Centre]は、ウェストミンスター区を中心とした行政や交通、人々の生活といった歴史に関わる資料を多く所蔵する公共施設である。その中のシアター・コレクション[Theatre Collection]は、ウェストミンスター区のみならず、英国全体の劇場に関するプログラムとプレイビルを所蔵している。その詳しい所蔵資料については、パソコン上でも検索が出来ずに、司書の方に調査内容を直接話した上で、関係資料を取り出してもらう。すなわち、現地に赴かなければ所蔵資料は確認できない。

今回は、ローシーとリーヴェがロンドンに在住していたとみられる 1902 (明治 35) 年から 1912 (大正元) 年に絞って資料を請求したところ、1901 (明治 34) 年から 1909 (明治 42) 年のアルハンブラ劇場のプログラムを 11 点、1899 (明治 32) 年から 1914 (大正 3) 年までのエンパイア劇場のプログラムを 14 点、計 25 点を閲覧することが出来た。当該期間の上演プログラムを全て所蔵しているわけではないが、二人が実際に上演に関わった作品はもとより、当時のヴァラエティ・シアターの上演形態や、レパートリー、関係者を知る上で、非常に貴重な閲覧となった。アルハンブラ劇場のプログラムは、コート紙にカラー印刷されたものからカラー紙に白黒印刷されたものへ、エンパイア劇場は逆の流れで変化しており、プログラムにおいても両劇場の違いを垣間みれた。また、そのほとんどが英語で書かれたアルハンブラ劇場のプログラムの中に、全篇フランス語で書かれたプログラムが残されていたほか、英語のプログラムであっても作品のあらすじのみフランス語との併用表記になっていたことは、当時のロンドンの状況とヴァラエティ・シアターの受容を考えるうえで、大変興味深い資料であろう。

閲覧できたプログラムを見てみると、アルハンブラ劇場はおおよそ夜 8 時から上演が始まり、最後の演目の始まりが 23 時 10 分からとなっていることが多い。プログラムは歌や寸劇、管弦楽による演奏などを含め毎回 10 から 12 程度の演し物が並び、前半と後半に 1 作品ずつバレエ・ディヴェルティスマン²か物語のあるバレエが上演されることが多いようである。それらは平均して、30 分から 50 分前後の作品である。また、殆どの作品は 1 か月、長ければ 1 年近くに渡って上演が続けられ、中には全篇ではなく、作品の一部分のみを取り上げて再演されることもあった。

記載されたキャスト表の中からローシーとジュリアの名前を探したところ、既知の作品を除き、新たにアルハンブラ劇場の 5 作品の上演にローシーが、2 作品にジュリアが関わっていたことが明らかとなった。ローシーは、その殆どの「バレエ」と書かれた作品において主要キャストを演じている。1909 (明治 42) 年 3 月 22 日付のプログラムを見てみると、ローシーは“Paquita”、“La Petite Bohémienne”、そして“On the Square”の計 3 作品にそれぞれメインキャストとして出演している。プリンシパル・ダンサーのジュリア・シール[Julia Seale]もローシーと同じ 3 作品に出演しており、当時のアルハンブラ劇場における公演実態の一面が明らかとなった。

新たにローシーの出演が認められた作品のうち、2 作品については、プログラムに詳細な作品紹介が記載されていた。滞在中に全て読み込むことは出来なかったが、全てデジタル・カメラで撮影して情報を持ち帰ることが出来たため、今後分析を行いたい。

一方で、閲覧したエンパイア劇場のプログラムからは、ローシー、リーヴェともに名前を確認出来なかった。

2-2. ロイヤル・アカデミー・オブ・ダンス内図書館におけるアデルリン・ジェニーコレクションの閲覧

ロイヤル・アカデミー・オブ・ダンス[Royal Academy of Dance]は、1920 (大正 9) 年に大英オペラティック・ダンシング協会[Association of Teachers of Operatic Dancing of Great Britain]として設立され、現在では舞踊、主にバレエの教師育成を目的とする王立の教育機関である。イギリスにおけるバレエは、ロマンティック・バレエ期以前から続き、歴史としては長いものの、イギリスで活躍した振付家やダンサーのほとんどが外国人であったために、所謂「イギリスのバレエ」というのが存在しないと言われる。そのため、イギリスのバレエの歴史は、現代に繋がる礎が築かれた 1920 年代以降から語られることもしばしばある³。しかし実際には、ロマンティック・バレエ衰退後も、ローシーらが出演したヴァラエティ・シアターにおいてバレエは上演され続け、20 世紀初頭のバレエ・リュス[Les Ballets Russes de Sergei Diaghilev]の登場をもってそれも衰退、イギリス・バレエ確立に向けた動きが始まるのである。ロイヤル・アカデミー・オブ・ダンス設立に関わった人物の一人が、デンマーク出身のバレリーナ、アデルリン・ジェニー[Adeline Genée]である。彼女は、1897 (明治 30) 年から 1909 (明治 42) 年までエンパイア劇場のプリンシパルを務め、圧倒的な人気を誇っていた。また、彼女は後年ディアギレフから熱心にバレエ・リュス参加のオファーを受けた

と言ひ、しばしば「二流のバレエ」(市川、1977、p.53)、『レヴュー』の名に値するもの」(クリストウ、1970、p.80)とも評されるヴァラエティ・シアターのバレエの中でもかなり高い技術を擁していた。

この施設は、そのジェニーに関する資料をアデリン・ジェニー・コレクション[Adeline Genée Collection]として所蔵している。事前に図書館の司書の方に連絡を取り、所蔵資料に関してリサーチを行ったが、詳細は分からず、実際に足を運ぶ必要があった。しかし、実際に赴き、ローシー夫妻の関係がうたがわれる1902(明治35)年から1912(大正元)年に絞ってプログラムや舞台写真等を中心に資料の請求を行ったが、詳細にアーカイブ化がされていないために、閲覧が叶った資料以外にも関係資料が残されている可能性があるが、詳細は分からないと言われてしまった。コレクション自体は膨大で、ジェニーの残した覚書や新聞・雑誌の切り抜きのほか、多くの舞台写真とポーズ写真が残されていた。切り抜きではジェニーがイラスト付きで度々紹介されている様子が残されており、改めて当時の彼女の人気の高さをうかがい知ることができた。

プログラムは、1901(明治34)年から1914(大正3)年のエンパイア劇場のもの14冊を閲覧した。記載されたキャスト表の中からローシーとリーヴェの名前を探したところ、ローシーの名前は確認できず、リーヴェは先行研究でも指摘されている1作品について名前が確認できた。

アーカイブ・センター所蔵のものを含め、閲覧が叶ったエンパイア劇場のプログラムからはローシーの名前が確認出来なかった。しかし、アルハンブラ、エンパイア劇場ともにプログラムは既出のゲストの上演リストを網羅しておらず、該当期間で少なくとも15作品について確認する必要があるが残ってしまった。

2-3.ウエストミンスター・レファレンス図書館における新聞記事の収集と閲覧

上記の2つの施設において一部のプログラムの閲覧が叶ったが、先述した通り、複数の作品についてローシー夫妻の関わりと作品の詳細について確認する必要があるが残った。そこで、既出のゲストの上演リストとプリッチャード氏から提供を受けた情報を手掛かりに、新聞記事からその実態に迫ることを試みた。

当時、ロンドンでは *The Penny Illustrated Paper*, *The Sketch*, *The Illustrated Sporting and Dramatic News*, *Ally Sloper's Half Holiday* など、劇場における公演やパントマイム、ヴァラエティ・シアターに関する記事を度々掲載していた新聞・雑誌が多く刊行されていた。本調査では、時間の都合上、当時の二大英国エンターテインメント専門新聞であった *The Era (Weekly)* と *The Stage (Weekly)* に限定し、初演日を中心に調査を行うこととした。筆者が調査を必要とする時期からは100年以上の年月が経過しており、ロンドン市内でも網羅的に所蔵している機関は少ないが、プリッチャード氏よりウエストミンスター・レファレンス図書館が比較的網羅しているとの情報提供を受け、同施設にて調査を行うこととした。

ウエストミンスター・レファレンス図書館[Westminster Reference Library]は、ウエストミンスター区の公共の図書館であり、アーカイブ・センターとともにシアター・コレクションの一部も所蔵している。筆者が閲覧した *The Era* と *The Stage* は、一部欠落があるものの、筆者の調査期間については殆ど所蔵されていた。紙媒体ではなくマイクロ・フィルムとして所蔵されており、閲覧に必要な機械が一台のみであったため順番を待ちながらの閲覧となったが、かなり多くの情報を得ることが出来た。

閲覧した2誌は、ロンドン市内のみならず英国全土のエンターテインメントに関する情報誌であり、上演の広告や批評はもちろんのこと、俳優の紹介やファンレターの送付先、俳優のゴシップ記事まで掲載されている。ロンドンに関する紙面では、シェイクスピア劇を主なレパートリーとし、当時人気を博していた俳優ビアボム・トゥリー[Herbert Beerbohm Tree]が主宰するヒズ・マジェスティーズ劇場[His Majesty's Theatre]を始めとする劇場を、'Theatre'、アルハンブラ劇場やエンパイア劇場等を 'Variety Theatre' として、完全に区別していた。前述したようにヴァラエティ・シアターのバレエが「二流である」との評価を受けるのは、こうした背景も関係しているものと思われる。

アルハンブラ劇場については、初演されたバレエ作品の殆どがその翌週記事に取り上げられ、その内容を詳細に伝えている他、キャストの紹介とともに、批評がなされている。滞在中に全てを読みきることはできなかったが、全て複写申請をすることができたので、今後深く読み込んでいきたい。その中で、1906(明治39)年に上演された“Les Cloches de Corneville”《コルヌヴィルの鐘》は、先行研究においてもローシーの好演が指摘されていたが、2誌の記事でも好演の様子が伝えられている。例えば *The Era* では、「彼の演技が最も印象的(中略)重要なドラマ性を役に与えた」(筆者拙訳, *The Era*, 1907.10.12, p.23)と、絶賛ととれる評価を記しており、ローシーのロンドンにおける評判をうかがい知ることが出来た。

また、前述した2つの文献および情報をもとに紙面を1面ずつ辿っていったところ、アルハンブラ劇場において、ローシーが4作品に、リーヴェが2作品に関わっていたことが新たに分かった。また、プログラムでは確認し得なかったエンパイア劇場においても、ローシーが2作品に、ジュリアが1作品に出演していたことが新たに分かった。ローシーが1910(明治43)年に出演した“The Faun”では、ロシアのバレリーナ、リディア・キャシュト[Lydia Kyasht]と共演を果たしている。キャシュトは、マリンスキー劇場出身で後年にはバレエ・リュスにも参加している。さらに、“The Dancing Master”では、同じくマリンスキー劇場出身のダンサー、アドルフ・ボルム[Adolph Bolm]の代役としてローシーが出演したとの記録があった。このような、ローシーと、当時世界のバレエを牽引していたロシア・バレエの最高峰マリンスキー劇場のダ

ンサーとの関わりを示す記録は、彼のダンサーとしての評価を考えるうえで、大変貴重な資料となるであろう。今回調査した限りでは、他にエンパイア劇場に出演した形跡が見つからず、上野の「エンパイアでの活動は、(中略) 短期間あるいは限定的なものだった」(上野、1992、p.7) との指摘を裏付けるものとなった。

以上の3つの施設において調査を行った結果、ローシーはアルハンブラ劇場においてゲストが挙げたバレエ作品のほぼ全てに主要キャストとして出演していたことが明らかとなった。これは、ローシーが約8年の間、主にダンサーとして継続的に上演活動に従事していたことを示すものであり、大変貴重な閲覧となった。

2-4. ヴィクトリア&アルバート博物館におけるシアター&パフォーマンス・コレクションの閲覧

始めに述べたように、本調査では閲覧室の訪問は叶わなかったが、シアター&パフォーマンス・コレクションの一部を常設展示室において閲覧した。それは、シェイクスピア劇全盛期の時代から今日のバレエやオペラ、ミュージカルに至るまでの英国のエンターテインメント史の軌跡を垣間みることが出来る。舞台照明や舞台設備の発展の歴史や、ローシーが活動したヴァラエティ・シアターについても、エンパイア劇場の復元模型が展示されるなど、彼の活動の背景をうかがい知ることができた。

3. 今後の研究へ

以上のように、本調査は移動日を除いて6日間と短期間で、急な訪問施設の変更がありながらも、大変有意義な調査となった。

特に、ローシーがロンドン時代アルハンブラ劇場においてバレエ作品にダンサーとして深く関わったことが明確になったことは、ローシーの人物像と彼の生涯に渡る舞踊活動の特徴に迫っていく上で、非常に貴重な知見となるであろう。

今後は、今回得られた資料を詳細に読み込み、分析することで、彼の在日中の活動をより明確にしていくことが課題である。

また、本調査によって、彼の在日中の活動のみならず、来日前の活動に関しても、未だ解明されていない点が多く存在していることが分かった。今後、今回果たせなかったヴィクトリア&アルバート博物館の閲覧室への訪問も含めて調査を継続し、彼のロンドン時代の活動についても探求したい。ひいては、それがローシーの在日中の活動の真相に迫ることに繋がるものと考ええる。

ローシーが来日した大正初期の日本は、明治維新から半世紀が経ち、近代化の波に乗って社会や人々の生活がめまぐるしく変化していくとともに、日本独自の文化に加え、あらゆる西洋の文化が流入した、言わば文化の揺籃期であった。こうした時代性を背景に、イタリアおよびロンドンという西洋の様々な劇場文化の陶酔を受けたローシーの日本における活動とその受容について検討すること、すなわち舞踊をはじめとする芸術や文化と社会の関係について研究を進めることは、舞踊学や芸術の領域にとどまらず、より学際的かつ国際的な研究として意義あるものと考ええる。その意味でも、本調査が国際的な女性リーダーの育成に関わるプログラムの一環として、目的を果たせたものと自負している。

本調査で得られた知見は、筆者の博士論文のおそらく第一章と第二章に関わるであろう。また、本調査の成果の一部を第66回舞踊学会大会(2014年11月30日 於日本女子体育大学)において、「G.V.ローシーのローヤル館における活動について」の題目で口頭発表を行った。

注

¹ 「ミュージック・ホール」と称されることも多いが、英国においてミュージック・ホール全盛期となった20世紀初頭には、

歌や踊りに加えて、手品や曲芸など演し物の種類が増え、所謂「ヴァラエティ」を観せる「ヴァラエティ・シアター」の呼称が一般化する。

² ディヴェルティスマン[Divertissement]は、もとは18世紀の舞台演劇における幕間の余興や、芝居のあらすじを結びつける歌や踊りのことを指したが、19世紀後半のバレエでしばしば用いられる、物語の進行とは直接関係しない一連の踊りや、

様々なソロ、デュエット、小グループによる踊りのコンサート等にもその呼称が用いられることもある。

³ イギリスの現代バレエを築いたとされるマリー・ランベール[Marie Rambert]とニネット・ド・ヴァロワ[Ninette de Valois]

は、1920年代にそれぞれバレエの学校を開いている。

参考文献

市川雅「世俗的バレエーエンパイア劇場について」『女子体育』19号、pp.50-56、右文館、東京、1977

井野瀬久美恵『大英帝国はミュージック・ホールから』朝日選書 395、朝日新聞社、東京、1990

上野房子「日本初のバレエ教師 G.V.ローシー 来日前の歩みを探る」『舞踊学』第14号、pp.1-11、舞踊学会、茨城、1992

- 上野房子「G.V.ローシー 日本初のバレエ教師 離日後の歩み (1918～1938)」『舞踊学』第 16 号、pp.61-62、舞踊学会、東京、1994
- 上野房子「アートとショービジネスの間で—ダンス揺籃期ロサンゼルスに G.V.ローシー—」『大正演劇研究』第 8 号、pp.88-103、明治大学大正演劇研究会、東京、2000
- 大笹吉雄『日本現代演劇史 明治・大正篇』白水社、東京、1985
- 大笹吉雄『日本現代演劇史 大正・昭和初期篇』白水社、東京、1986
- 大場建治『ロンドンの劇場』研究社出版、東京、1975
- 日下四郎「ロンドン、ウエスト・エンド時代の G・V・ローシー」『舞踊学』第 7 号、pp.43-44、舞踊学会、東京、1984
- 里見悦郎「英国クラシック・バレエ教育史研究—ビクトリア期英国バレエの萌芽期と 1920 年代バレエ教師組織化の動き—」『比較舞踊研究』10 巻 1 号、pp.34-47、比較舞踊学会、千葉、2004
- 鈴木晶『バレエ誕生』新書館、東京、2002
- 鈴木晶編『バレエとダンスの歴史：欧米劇場舞踊史』平凡社、東京、2012
- 曾田秀彦『私がカルメン』晶文社、東京、1989
- 星野高「〈エンパイア〉と帝国劇場」『劇・ドラマ』43 号、pp.6-9、劇場文化・ドラマの会、東京、2009
- 増井敬二『日本のオペラ 明治から大正へ』民音音楽資料館、東京、1984
- Christout, Marie-Françoise, *Histoire du ballet*, Presses universitaires de France, Paris, 1966 (佐藤俊子 (訳) 『バレエの歴史』白水社、東京、1970)
- Craine, Debra & Mackrell, Judith, *The Oxford Dictionary of Dance*, Oxford University Press, 2000 (鈴木晶 (監訳) 『オックスフォード バレエ ダンス事典』平凡社、東京、2010)
- Reyna, Ferdinando, *Histoire du ballet*, Editions Aimery Somogy, Paris, 1964 (小倉重夫 (訳) 『バレエの歴史』音楽之友社、東京、1974)
- Beaumont, Cyril W, *Complete book of ballets : a guide to the principal ballets of the nineteenth and twentieth centuries*, Putnam, London, 1956
- Clarke, Mary & Vaughan, David, *The Encyclopedia of dance & ballet*, Pitman, London, 1977
- Guest, Ivor, *Ballet in Leicester Square*, Dance Books, London, 1992
- Guest, Ivor, *Romantic ballet in England*, Dance Books Ltd, London, 2014
- Haskell, Arnold L, *The national ballet : a history and a manifesto*, A. & C. Black, London, 1943
- Pritchard, Jane, Collaborative Creations for the Alhambra and the Empire, *Dance Chronicle*, Vol. 24, No. 1, pp. 55-82, 2001
- Pritchard, Jane, Archives of the Dance (24) The Alhambra Moul Collection at the Victoria and Albert Museum, *Dance Research*, 32-2, pp. 233-257, Edinburgh University Press, 2014
- , LES CLOCHES DE CORNEVILLE, *The Era (Weekly)*, 12th. Oct, p. 23, 1907

やまだ さやか／お茶の水女子大学大学院人間文化創成科学研究科

指導教員によるコメント

山田小夜歌さんは、日本バレエ草創期に来日した G.V.ローシー[Giovanni Vittorio Rosi, 1867-?] の舞踊を中心とした活動に焦点を当て研究を行っている。日本バレエ史におけるローシーの位置づけを明らかにしようとするためには、来日前のロンドンでの彼とその妻リーヴェの舞踊活動における史資料収集が必要不可欠である。従って、海外調査研究の目的は、ローシーとリーヴェの 1902 年から 1912 年までのアルハンブラ劇場[Alhambra Theatre]、エンパイア劇場[Empire Theatre]の公演プログラム、舞台写真、関係する新聞・雑誌記事といった史資料の収集と閲覧を行うこととした。調査はロンドン滞在 6 日間という短期間であったが、多くの機関や施設での閲覧及び史資料収集をなし得たことは大きな収穫であった。本調査で得られた史資料を用いた研究内容は、博士論文の第 1 章と第 2 章に関わる重要な部分になるであろう。また、本調査の一部を第 66 回舞踊学会大会にて発表を行ったことも研究の進展につながる。さらに、この研究を深化させることによって舞踊学への貢献を期待している。

(お茶の水女子大学人間文化創成科学研究科 (文化科学系)・猪崎 弥生)

Research on the Activity of G.V.Rosi in London

Sayaka YAMADA

The aim of this research is to find out the activity of Giovanni Vittorio Rosi [1867-?] during his years at Variety Theatre in London.

I've visited City of Westminster Archives Centre and Royal Academy of Dance to examine programs of two Variety Theatres: the Alhambra and the Empire.

I've also visited Westminster Reference Library to research reviews and critiques on those two theatres in newspapers.

Rosi had participated in almost all of ballet works as a principle dancer, and he had also choreographed or revised some works, especially in the Alhambra.

His activities in Japan will become clear through investigation and analysis of these research result.